

日蓮大聖人御書全集

じゅりょうほんとくいしょう

寿量品得意抄

新版

2141

ς

2143

じゅりょうほんとくいしょう

寿量品得意抄

きょうしうしゃくそん じゅりょうほん と にぜん しゃくもん 聞
教主釈尊、寿量品を説き給うに、爾前・迹門のきき
舉 のたま いま いっさいせけん てん にん あしゅら みな
をあげて云わく「一切世間の天・人および阿修羅は、皆、
いま しゃかむにぶつ しゃくし みや い がやじょう さ
今の釈迦牟尼仏は釈氏の宮を出でて、伽耶城を去ること遠
どうじょう ざ あのくたらさんみやくさんばだい え
からず、道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を得たまえり
おも うんぬん とお
と謂えり」云々。

この文の意は、初め華嚴經より終わり法華經安樂行品
もん こころ はじ けごんぎょう お ほけきょうあんらくぎょうほん
いた いつさい ほとけ みでし だいぼさつとう し
に至るまで、一切の仏の御弟子、大菩薩等の知るところの
おも しんちゅう おも
思いの心中をあげたり。

にぜん きょう ふつ とが いち ぎょうふ そん ゆえ 爾前の經に二つの失あり。一には、「行布を存するが故に、
なおいまだ權を開せず」と申して、迹門方便品の十如是の
一念三千・開權顯実・二乗作仏の法門を説かざる過なり。二
には、「始成を言うが故に、なおいまだ迹を發かず」と申し
て、久遠実成の寿量品を説かざる過なり。この二つの大法
は、一代聖教の綱骨、一切經の心髓なり。
迹門には、二乗作仏を説いて、四十余年の二つの失一つ
を脱したり。しかりといえども、いまだ寿量品を説かざれ
ば、実の一念三千もあらわれず、二乗作仏も定まらず。水

宿

つき

ねな

くさ

なみ

うえ

う

こと

にやどる月のゞとく、根無し草の浪の上に浮かべるに異ならず。また云わく「しかるに、善男子よ、我は實に成仏してより已來、無量無辺百千万億那由他劫なり」等云々。この文の心は、華嚴經の「始めて正覺を成す」と申して始

めて仏になると説き給う、阿含經の「初めて成道す」、

淨名經の「始め仏樹に坐す」、大集經の「始めて十六年」、

大日經の「我は昔道場に坐す」、仁王經の「二十九年」、

無量義經の「我は先に道場にして」、法華經方便品の「我は

始め道場に坐す」等を、一言に大虚妄なりと打ち破る文な

り。

本門寿量品に至つて始成正覺やぶるれば四教の果やぶ
れ、四教の果やぶれぬれば四教の因やぶれぬ。因とは修行、
弟子の位なり。爾前・迹門の因果を打ち破つて、本門の
因果をときあらわす。これ則ち本因本果の法門なり。
九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界にそなえて、
実の十界互具・百界千如・一念三千なるべし。

こうしてかえつてみるときは、華嚴經の台上盧舍那、
阿含經の丈六の小釈迦、方等・般若・金光明經・
阿含經の丈六の小釈迦、方等・般若・金光明經・

あみだきょう だいにちきょうとう ごんぶつとう じゅりようほん ほとけ てんげつ
阿弥陀經・大日經等の權仏等は、この寿量品の仏の天月
のしばらくかげを大小のうつわものに浮かべ給うを、
しょしゅう ちしゃ がくしようとう ちか じしゅう 惑 とお
諸宗の智者・学匠等は、近くは自宗にまどい、遠くは
ほけきょう じゅりようほん ちか じしゅう とお
法華經の寿量品を知らず、水中の月に実月のおもいをな
すいちゅう つき じつげつ 思
して、あるいは入つて取らんとおもい、あるいは縄をつけ
てつなぎとどめんとす。これを天台大師、釈して云わく「天
げつ 繫 留
月を識らず、ただ池月のみを観ず」と。心は、爾前・迹門
しゅうじやく もの かん こころ にぜん しゃくもん
に執著する者は、そらの月をしらずして、ただ池の月を
しゃく
のぞみ見るがごとくなりと釈せられたり。また僧祇律の文
そうぎりつ もん

に「五百の猿、山より出でて、水にやどれる月をみて入つてとらんとしけるが、実には無き水月なれば、月とられずして水に落ち入つて猿は死にけり。猿とは、今の提婆達多・六群比丘等なり」とあかし給えり。

一切経の中につきの寿量品ましまさづば、天に日月無く、
國に大王なく、山海に玉なく、人にたましい無からんがごと
し。されば、寿量品なくしては一切経いたずらざとなるべ
し。根無き草はひさしからず。みなもとなき河は遠からず。

親無き子は人にいやしまる。詮づるとこゝろ、寿量品の肝心

なんみようほうれんげきよう

南無妙法蓮華經こそ、

じっぽうさんぜ

しょぶつ

はは

おわ

そうちら

きょううきょううきんげん

候え。恐々謹言。

にちれん

かおう

日蓮

花押

四月十七日